
撲殺乙女☆修羅街道！！

c.m.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

撲殺乙女☆修羅街道！！

【Nコード】

N1535L

【作者名】

c.m.

【あらすじ】

ようやく来ました異世界トリップ！ さえない武道バカな女ですが、これで行くヒロインに！
目指せ逆ハーレム！ ……そう思っていた時期が、私にもありました。

痛快バイオレンスコメディここに開幕！

※Arcadiaさまにも投稿しています。

001 ヒロイン？ 無理です出直してきて下さい（前書き）

本作は激しくキャラがぶっ壊れています。レイジングハートさんが黒いです。

カオスです。それでも良い方のみお進みください。

001 ヒロイン？ 無理です出直してきて下さい

切り裂く夜風に肌寒さを少し感じながら、私は路上を歩いていた。何気ない帰り道。だが、それさえも耳に響くSOS信号を前には思わず全力疾走するしかないだろう。

そう。私、宮本千草は走っている。

何故かって？ 皆さんはトリッパーと言う存在はご存じだろうか？ ある時はトラックに、ある時は神様に、ある時は悪魔に、ある時はイタ車に撥ねられて転生なり異世界訪問なりするあれですよ。私も二次創作書いてる手前、結構そういったシチュエーションを読んでいたのですが。

もう判りますね？ 来たよ来ましたよ私の異世界フラグが全開です！

しかもこの声は淫獣と名高きユーノ君！ ああ、これで昔のような影が薄く、仕事に追われっぱなしの日々とはおさらばです！ もう影が薄いとか、武道バカとか、嫁ぎ遅れとかなんて言わせません！

リリカルでマジカルな世界を存分に堪能させていただきます！ 私はいん……何とかさんにはなりたくない。あんな名前さえ忘れられて最終的には、『誰？』としか言われない末路はまっぴらごめんです！

私が宮本千草だ！ と俺がガンダムだ！ 的な絶叫をしつつ学生時代は百メートルを十二秒フラットで走り抜けた脚力で全力疾走中！

——だが！ 今私は人生の絶頂期に居る！

そう！ 魔法少女ですよ！ あの魔法少女ですよ！！

判りますか！？ あの魔法少女ですよ！！ 大事なことなので三回言いましたが、私は今その階段へと駆け上がりとしているのです

!!

ああ……恥ずかしくもなんと素晴らしい響き。元は二十後半でありながらこの世界に於いては学生時代もかくやという肌年齢と肉体を維持している私は——実年齢はそのままでも——充分行ける筈!! 十九と言う年齢で少女名乗っている痛い三人だっているのだから、私にもチャンスはある!!

——そう思っていた時期が、私にもありました……。



『無理です、出直してきて下さい』

「ちょ、レイジングハート!? この人の魔力値はオーバーSランクだよ! 魔導師としては最高なんだよ!」

『ふ……ユーノ。貴方の目は腐っているんじゃないですか? 淫獣と化して脳にまでダニが回りましたか?』

よく見なさい。肌年齢や肉体が十代後半から二十代前半とはいえ、実年齢は2■歳といったところでしようが。

StSでも十代後半になってしまいう女に握られて熟女好きの連中がディスプレイに食い入るように見つめられて来た時でさえ、私はマスターにいい年こいてそんな誰得なサービスシーン見せつけてんだと唾を吐きたくなったのに、現時点で2■歳のオバサンに握られるなんて有り得ません。

私は断固拒否します。つうかStSになったらヴィヴィオに私を継承するよう何故誰も言わなかったんですか? アンタらが好きな幼女のサービスシーンですよ? 視聴率が鰻登りですよ? 企画者馬鹿なの? 死ぬの?

まあ、そんな愚痴はどうでもいいですね。つうかここまで聞けば

判んだろ。誰もババアのサービスシーンなんぞ期待してねえんだよ。さっさと帰れ。そして今のうちにまだ旬の白い悪魔を連れてきなさい。A'sまでなら使われて上げますから」

そして、私の中の何かが切れた。

「いい度胸だ。つうか淫獣、その杖か貸せやコラ」

「は、はい！ どうぞ！」

『ふ……一話早々にして淫獣と認めるとは、所詮日陰者ですね。まあ空気系ヘタレキャラには何も期待しちやいせんが。』

それで？ 私をどう使う——って、イダダダダッ……

！？ 軋んでる！ 何か亀裂とか走ってるんですけど！？ つうか何やってんですか！？ 貴女やる気あるんですか！？ こんな事したら視聴者どん引きですよ！？』

「貴様が毒を吐きまくった時点で清純キャラの道は消え去ったわ。もういい。私に萌えの才能が無ければ、こっちでPV数を稼ぐのみ！！」

『そんなバイオレンスコメディ誰も期待しちやいねえんだよ熟女！ 既にジュエルシードが戦意喪失して土下座モードで“どうぞ納めください”とかって感じで身体突き出して自己封印モードに突入してんだよ！！ 事件解決してんだからさっさと帰れ！！』

「うっせえ、何気に英語から日本語モードに突入してるから楽だし丁度良いやと思っただろここぞとばかりに毒吐いてんじゃねえぞ馬鹿杖。そんなに私が相応しくないなら私らしい武器にモードチェンジにしてくれるわ」

『止めろッつってんだろが！ いい加減私は疲れたんだよ！！』

初めにこの企画持ちあがった時に担当が“燃える魔法少女”とか言い出した時に何かヤバイなとは思ったらマスコットは淫獣で魔法少女は悪魔でしかもババアになるまで握られるなんぞ聞いてなかったんだよ！！

私が目指してんのはちよっぴりエッチでハートフルなラブコメか少女漫画チックなロマンスものなんだよ!! それがこの企画の所為で固定砲台みたいな砲撃かましたり自動小銃みたいなマガジン付けられてガンダム最終回のフィニッシュ技みたいな砲撃を連射で撃ちまくりやがって!! 企画者出てこい!!

……つうか、マジでやめて——! 私はすずちゃんみたいな御淑やかな子に握られたいのだよ!? あの子何気にポイント高いし!! 地味だけど」

そんな事は誰も聞いちゃいねえんだよ。そんなに魔改造して欲しくないなら全力でしてくれるわ。

『やめろ』

『!!!!!!!!!!!!!!』

立ち込める黒い霧。溢れる金色の闇。これどう考えても主人公とかヒロインじゃなくてラスボスの登場シーンだろと言う場面に於いて、それは現れた。

直径二メートルはあろうかという巨大な鉄球には残酷さを醸し出すが如く無数のトゲトゲがウニのように突き出し、その鉄球に繋がった鎖が私の持つ杖の先端に繋がっている。

モーニングスター。名前こそ爽やかなくせして相手に見せるのは目覚めの朝ではなく、脳漿ブチまけた後で地獄へGOさせる驚異の撲殺武器である。どう見てもヒロインが持つ様なアイテムじゃねえ。

「ふ。ふふふ……ええ、判っていましたよ、判っていたんですよ。所詮私は嫁ぎ遅れた女。ヒロインになる資格がねえ事ぐらい判ってましたとも」

目から零れる心の汗に熱さを感じつつ、『だったら最初から握る

んじゃねえ』というレイジングハートの声を黙殺する。
つうか、この杖。まだ自我を保ってやがったか。

「さて。始めるか」

こちらを見てビビったのか、部屋の隅でガタガタ震えて命乞いな
んぞしているジュエルシードに杖を向ける。

なんかこうジャラジャラと音を立てる鎖の音にサドな心が湧きあ
がりつつ、杖と言う名の鉄球を振りおろした。

※あまりに残酷な為、効果音のみお届けいたします。

ドン！ グシャ、グシュ！

ブン……！！ ベキベキッ！！ グチュ、ブツシャアアアアア

……！！

「終わったわ」

『ええ。私の淡い期待も、新たなヒロインが魔王を越える魔神とい
う結末によって幕を下ろしました。』

もうヤケです。新タイトルでバイオレンスコメディを目指しまし
よう。私と貴女なら“撲殺天使”や“大魔法峠”さえ目じゃありま
せん。これからイギリスに行って吸血鬼と一緒にナチの野望を潰し
たり、ロアナプラでラグーン商会の連中と共に血と硝煙の世界を築
きあげましょう』

そうして私たちは歩きだす。ジュエルシード？ プレシア？ 知
った事か！！ 私はいこれから最後の大隊との決戦に向かうのだよ！！

次回！ 『魔法少女リリカルなのは』改め、『撲殺乙女☆修羅街
道！！』

新たなる世界を見逃すな！

第二話は『吸血鬼とデストロイ☆』 勇気の証はKILL THE
MALL (皆殺し) よ☆

001 ヒロイン？ 無理です出直してきて下さい（後書き）

えー……読者の皆様は色々と言いたい事が、ある事でしょうが、取り敢えずリリカルファンの方、ごめんなさい。

実はこの作品、こちらに出す前は『物語を紡ぐもの』のNGとして書いていたのですが、

NGシーンで終わらせるのな、と思い、修正してこちらに出した次第でございます。

ちなみにここだけの話、この主人公の経歴はすべて作者の実を基にしていたりします。

それでは、また次回お会いしましょう。失礼致します。

002 吸血鬼とデストロイ☆ トバルカイン暁に死す！

ここは常夏。私達はモンスーン気候特有の湿っぽい夏の日本を離れ、現在南米ブラジルの首都、リオデジャネイロのホテル『リオ』へと気ままなバカンスを送っております。

私達、そう私達だ。あのバカ杖を含めてしまえば納得は行くかもしれないが私はあの杖に人権なるモノを認めた覚えは無い。では何故複数形なのか、その理由は。

「お姉さま。一緒に泳ぎませんか？」

「姉貴！ フェイトもこう言ってるし、一緒に泳がないかい？」

そう。リリカル勢ならばお馴染みであるフェイト&アルフコンビである。

何故ここにこの二人がいるのかを説明すると長いので色々と端折って説明しよう。



あの後。このバカ杖に入っていたジュエルシードも含め、計二個のジュエルシードと共に海鳴市を去る筈だったが、そうは問屋がおろさなかった。

深夜でサイレンの音が鳴り響き、警察やら消防署やらでこった返したところで何とフェイトが月村邸どころか一話開始からこちらに襲撃。

テンパった警察が発砲したがバリアジャケットにそんなもんが効く筈も無く、機動隊やら自衛隊やらで無茶苦茶な場所になったので

取り敢えず一人と一匹を連れて逃走。なんとかその場をやり過ごした。

ユーノ？ 置いてきましたか何か？

で。事情を聴いたり虐待で出来た背中中の傷を治したりして、結局こっちも放っておけなくなり、ジュエルシードの回収の協力。

クロノやら管理局やらが出てきたため、フェイトを保護して貰おうかと思ったのだが……。

「あら、それならぜひ管理局に入らない？ 貴女ぐらい優秀な魔導師なら働き手はいくらでもあるし、多少嫁ぎ遅れていても熟女好きな人も多いから心配無いわ。ババ専の人だっているし」

言葉にあるアリアリとした蔑みの毒舌。もうお分かりですね？ キレましたよ。ええキレましたとも。

「黙れバツイチ。そんなに嫁ぎ遅れた奴を見て楽しいか？ どうせ管理局が忙しいとか旦那がいるからとかはこじ付けでモテないだけだろうが年増」

『流石はマスター。中々鋭いですね。確かにこの女は見た目若くとも中身は熟女。』

実年齢を考えれば売れ残ったクリスマスケーキやバレンタインデーを過ぎたチョコレート並みに価値はありません。私からすれば両方とも大差はありませんが』

もはや火に油どころかガソリンをぶちまけた挙句にダイナマイトまで放り投げるレイジングハートによって、管理局との全面戦争は勃発。

プレシアのフェイトはいらない宣言で画面が消えたのを合図に、

鬼の形相でアルカンシエルを装備したアースラ突撃モードでこちらを追いつき、戦艦対人間という有り得ねえバトルが繰り広げられた。海鳴市は私が結界を張っていないければ一夜にして火の海になっていたに違いない。

最終的にフェイトのマンションから時の庭園へ逃げる事に成功。

その後、全二十一個のジュエルシードをフル活用してプレシアが次元震を引き起こそうとしたものの、私のドロップキックで難を逃れた。

そしてまあ都合のいい事にジュエルシードを全て手中に収めた私に対して、フェイトに私を殺すようプレシアは命令したのだが……。

「嫌です。この人は私の姉になってくれると言いましたし、ずっと一緒に居てくれると約束してくれました。他人の貴女より、私はお姉さまに全てを捧げたい」

と、まあ今まで構ってあげた為か、惚れられてしまった。確かに私は寂しそうにいつもしていたからお姉さんになってあげるとは言ったが、そういう意味では断じてない。

フェイトさん。私に百合属性は無いんですけど。ていうかお姉さまは勘弁して下さい。

そして最終的には管理局の武装局員が乱入。こちらが転移術式で逃げようとするや否や、リンディの奴、管理局員やプレシアごとアルカンシエルをぶっ放しやがった。

あの『人がゴミのようだ』発言は永久に私の中から消えない事だろう。

結局こちらは辛くも生き残り、時の庭園と武装局員は行方不明と言う形で幕を閉じた。

ちなみにレイジングハートで管理局のデータベースにハッキングした結果、どうやらあの事件の主犯は私になっているらしく、『時空管理局最大の敵』として現在十萬ルーブルの賞金がかけられている。

る。私は何処のスツーカーの悪魔だ。



こんな感じで認識障害の魔術をかけつつ国外へ逃亡し、一息ついた所でホテルのプールで悠々とバカンスを楽しんでいる訳だが。

『しかし、逃走中の時もそうでしたが、うちのマスターは本気で女を捨ててますね。

つか何ですかそのゴツゴツとした手や割れた腹筋は。女として恥ずかしくないんですか？ 旬が過ぎて諦めの境地にでも達しましたか？』

余計なお世話だ。とバカ杖の言葉を一蹴する。

よくトリッパーなんかは元が駄目オタやニートの連中が強キャラになるのが主流だが、私は魔力資質の高さや能力以外……詰まる所自分の体に関してはしっかりと自分で鍛えている。

こちらにトリップするまでは会社にちゃんと勤めていたし、学生時代は小学校入学から空手を嗜み、中学から剣道、高校では柔道を行い、大学では合気道にも手を出した。

これだけ聞けば一か所に留まらず、長続きしなかったように聞こえるかもしれないが、小学校から始めた空手は中・高・大学生時代は寮などで道場に通えなかった時もトレーニングや型稽古を欠かさなかったし、近場にある同流派の支部の道場に顔を出したり、他流派の道場に出稽古にも行った。

社会人になっても一日だって武を手放した事は無い。私は生涯現役でいるつもりだ。

赤ん坊みたいにごろりと丸く、大きくなった手。肘や脛など所々

が黒ずんだ箇所。確かにこれらは女性として恥じるべき点かもしれないが、武道家としては誇れるものでもある。

まあ、これ以上この話を続けると脱線し続けてしまうし、こんなのはこの物語には合わないので話を戻そう。

例えば今、この微笑ましい空間で目から血涙を流している色黒男とか。

「もう勘弁して下さい……！　これ以上は、これ以上はア……！」

「なにを言ってるのかしら？　ナンパついでにこちらにポーカー仕掛けてきたのは貴方でしょう？　しかも自分はお金の代わりに身体を見せてほしいとかって言い出したんだから、こっちが脱ぎ切るまでは終われないっていう最初の契約を反故にする気？」

それに泣き叫ぶのならもう少し気合を入れて叫びなさい。豚のような悲鳴にはまだ遠いわ」

察しの言い方はこの時点で男の正体を看破した事だろう。ここ南米におけるボスキャラにして最後の大隊『ミレニウム』の構成員、トバルカインその人である。

あのアーカードに血を流させたという点やクライマックスに於いてトランプで武装ヘリを撃ち落とすという強キャラっぷりを発揮した男だが、今となってはトランプ模様の入ったトランクス一枚に帽子が一つという如何にも大負けしてますといった状況である。

「ほらほらどうしたの？　私はシャツを捨てて要望通り結構きわどいビキニまで着てるのよ？　あと少しじゃない。っと、また私の勝ちね。

それじゃあハートのクイーンを貰うわ。さあて。次で貴方の大切なハートのキングが私の手に落ちちゃうわね？」

「ヒィ！？」

実はこのゲーム現金を直接賭けてはいない。実のところこっちに
来た際に寝て暮らせるだけの金額が通帳に入っていたというのもあるが、この男のランプにはかなりの魔術効果が付与されているため、そっちの方が欲しかったというのが最大の理由である。

「ああああ……そ、それは！ それだけは！ そのキング・オブ・ハートは我が師、東方不敗マスターアジアより継承したものであるのです！ 後生です！！ どうか、どうかそれだけはご勘弁を！！」

マジで？ まさかあの東方不敗から継承とは……待て、それだとドモンはどうなったの？ まあ別にどうでもいいか。

「けどそうなるって貴方も流派東方不敗を継承したの？」

「貴方も？ まさか……貴女も流派東方不敗を伝授して頂いていたとは！ 先達のご拝顔に預かり、誠に恐縮でございます！ 先の無礼をお許し下さい！！」

いや違うし。土下座とかされても困るんだけど、トランクス一枚の男は好みじゃないし。この男自体好みから外れてるけど。

「いえ私は」

「なにも仰らないで下さい！ 貴女様の鍛え上げられた雌獅子のようなお身体、巖の如き拳！ 武人としてでなく、一人の女性としてしか見なかった私の曇った眼でもようやく理解できました！ ただの観光客と思っておりましたが、こうしてはおれません！

今日中にこのホテルからお引き揚げ下さい！ この最上階に住まうのは人ならぬ身、『化物』にございます！ 貴女様の腕を信じぬ訳ではございませんが、何とぞお願いいたします！」

「ま、まあ……そういう事なら」

「ありがとうございます！ 流派東方不敗の名に懸け、此度の戦い、

我が勝利で終わらせる事をここに誓いましょう！　して、貴女様のお名前は！？」

「み、宮本千草だけど……」

「チグサ・ミヤモトですな！　その名、我が生涯に於いて忘れる事はないでしょう！　これは先の愚行に対するお詫びにございます！　我が名、トバルカイン・アルハンブラと共にこのカードを預かっていただきたい！」

差し出されるランプには紛う事なきキング・オブ・ハートのマーク。何と言うか……ここまで誤解されると悪いというか、もうカードは手に出来ないというか。

「いえ。私はこれを預かれないわ。これを持っているのは、キング・オブ・ハートを継承した貴方だけよ」

滝の如く溢れる滂沱の涙。私の発言が壺に入ったのか、ガシッと手を掴んで離さなかった。

「何と言うお言葉！　私は、私は光栄でございます……！　ではチグサ殿、いずれお会いしましょう！」

そういつて無数のランプと共に消えて行ったトバルカイン。台詞だけならカッコいいが、トランクス一枚に帽子というスタイルが全てをぶち壊しにしていた。

「あ、姉貴。あいつ、姉貴の知り合いだったのかい？」

「お姉さまって、奇抜な方とお知り合いだったんですね」

「いや、違うから。断っじて違うから」

こうして、何とも言えない微妙な空気のまま、私達のバカンスは夜を迎えて行くのだった。



そして迎えた深夜。避難勧告の出たここに敢えてまだ残っているのは、これから繰り広げられる戦いを見届ける為か、それとも特殊部隊の流血を避ける為か。それはさておき。

「フェイト。取り敢えずその刺激的すぎるネグリジェと下穿きは貴女には早いから止めなさい」

「え……？ お姉さま、ひょっとして子供っぽい方が好きですか？」

いや。そもそも私に百合属性は無いし。第一私の趣味は年下の可愛い男の子だから。

シオルターとかシュレディングーとか。

……ちなみに淫獣は唯一の例外である。あ。あの魔法使いな子供先生も例外だから二人か。

『そうですよ。マスターも女を捨ててるとはいえ一応は自称乙女。素材が良いくせして嫁ぎ遅れたのはシヨタコンが最大の原因ですね。ていうかシヨタコンはキモがられますよ？』

「黙れバカ杖。男のオタの99.9パーセントがロリに目覚めるように女のオタがシヨタに目覚める事も必定よ。第一、今時の男はバカテスの『秀吉』とか、ギルティの『鯉』とかシヨタに目覚めていくせに女のシヨタコンを否定する権利は無いわ。

故に私はこの一件が終わった後にシヨタの帝国を模索してるの。所謂逆ハーレム計画の為に」

「あ、あの……私は？」

「いや。誰もフェイトを置いていくなんて言ってないから」

私の発言に心底安堵するフェイト。正直、今の私はつらいです。百合属性ないし。

が、そんなほのぼの？ とした会話もアルフの叫びによって終止符を打った。

「姉貴！ 何か変な匂いがする！ あのトランクスの変態が言っていたの嘘じゃなかったようだよ！」

「ふん。やはり始めたか『化物』を斃すのは『人間』だが、『人間』を滅ぼすのも『化物』の務めか。征わよアルフ、フェイト。バリアジャケットの装甲を限界まで引き上げなさい」

既に戦闘状態となった二人を確認すると、レイジングハートを手にはドアを蹴破る。

そこには。

「なッ……！！？」

「ぐ、グール！？」

その光景にフェイトとアルフは驚いたのだろう。無理も無い。吸血鬼を斃す為に突入した部隊は一人残らずグールだった。

「ク……！ こんな所にまでアンブレラ社の陰謀が！？ Tーウィルスが感染する前に、ここを隔離しなくては！」

『マスター！ 救急スプレー三つ手配してハーブを三色組み合わせておきました！ これで全回復とHPゲージが一ポイント増加します！ さらにこんな事もあるかと新機能を追加しておきました！』

なに！？ まだ二話だと言うのにここに来て新機能だ！？ 無限口ケットランチャーや無限マシンガンは一周目をクリアしなければ

ば手に入らない筈では!?

『ふっふっふ……マスターの言いたい事は判ります!　しかし、その不可能を可能にするのがジュールシード!　この新機能の為に一個消費してしまいましたが、この装備なら惜しくは無いでしょう!』

変形ロボットよろしくガシャガシャと形を変えていくレイジングハート。

この未来感あふれる特徴的な形状に銀の光沢、も、もしや!?

『そう。バイオ4プロフェッショナルを攻略した者にのみ授けられるステキ未来銃P・R・L412!　今回は私の変形形態と言う事で、チート改造も施しました!』

「装弾数と連射速度、被弾範囲は?」

『無論無限です。通常の小銃と同じくセミ・フルオートのみ変更を変えられるだけで、連射変化が可能!　サイドのつまみを回せば被弾範囲の縮小、拡大もできます。最大でアルカンシエルの砲撃、最小で拳銃の一発と同程度の範囲までの調節が可能です!』

「威力は?　ディバインバスタークラスか?　スターライトブレイカークラスか?」

「通常でディバインバスタークラス。最大でスターライトブレイカー五十発分の砲撃も可能です!」

「パーフェクトだレイジングハート。これならばアーカードさえ討ち滅ぼせよう」

『感謝の極み』

「つて、グールが来てる!　来てるってば姉貴い!」

ふ……お化け系が怖いとは、可愛いところがあるじゃないの、アルフ。

もうちょっとそんな貴女を愛でていたいけど、私の妹分達に手を上げようとするなんて……。

「こんばんは。そして、さようならグール。貴様らは私の妹分に喰らいつこうとした。」

その行為、万死に値する！　ぶち殺すぞ腐肉が！！」

放たれる銀の閃光。既に死の軍隊と化した者が、骨肉の一片も残さず消し飛んだ。

S i d e ー o u t

紅き月夜。草木さえ凍てつく夜の中、その男は玉座より降りる王の如くホテル入口から威風堂々と現れた。

身を包む装束は紅。今宵この地で繰り広げられた惨劇にふさわしくもおぞましい形相を浮かべ、人ならぬ魔性の笑みを以て階下を見るやる。

この王に臣下は無く、されどかつての王と同じ行為を以て人々の心を掌握した。

暴君を暴君足らんとするモノ。それは恐怖によって民衆の根幹を支配することである。

ブラム・ストーリーカーの吸血鬼のモデル、『グアド・ドラキュラ』よろしく側面のポールに警官隊を串刺しにしたこの男を、テロのホテル占拠と言う誤情報を元に集った報道陣がどのような目で見るのかは想像に難くない。

そして、その吸血鬼の呼び声に一人の男が馳せ参じた。

トバルカイン・アルハンブラ。流石にギャンブルで負けた時の姿ではなく、香港などで見かけるような民族衣装さながらの長衫に身

を包んでいる。

そこにあるのは本編見せた気軽なものではなく、むしろ死地へと望む武道家のそれである。

「ほう……随分と気負っているじゃないか」

「お初にお目にかかる『吸血鬼』アーカード。貴方に敬意を表し化け物を差し向けたのですが、ご満足いただけましたかな？」

「連中では私を殺せん。HELLSING本部での教訓が活かされていないな。化物を倒すのは、いつだって『人間』だ」

成程、と微かに歪めた口元を正す。これより先、ここからは自分にとって組織の方針以上の事があると言うように。

「申し遅れた。私の名はトバルカイン・アルハンブラ。近しい者からは『伊達男』などと呼ばれております。貴方が突き止め、ここへ来た『ミレニウム』の隊員でもある。

だが……今の私はそんなものではない。流派東方不敗！ マスターアジアが一番弟子！ トバルカイン・アルハンブラ！ 我が師と流派、そして先達の名に懸け貴様をここで討つ！！」

懐から零れ落ちる無数のカード。それはアーカードが改造銃の銃爪を引くより先に全身を覆い、トバルカインが右手を横一文字に薙いだのを合図に襲いかかる。

巻き起こる粉塵。砲弾を用いたかのような爆発は、それがただのトランプではないことの証明であり、トバルカイン自身の技量である事を窺わせる。

濛々と立ち込める粉塵が晴れ、微かにトバルカインの口元が歪む。それは仕留め切れなかった事への不甲斐無さか。それとも戦いが続く事への歓喜か。

いずれにせよ関係は無い。今日の前にある現実。『吸血鬼』は生

きているという事実こそが絶対なのだから。

切り裂かれた頬から微かに零れる血をアーカードは指で掬うと、侮蔑をこめた眼でトバルカインを見やり、口を開く。

「成程、お前らだったか。ならばこの私が相手をするのは道理だな。一度亡ぼされた程度では何も分らんか……」

言うや否や、アーカードは漆黒と白銀の銃を構え持つ。都合四発。左右二発ずつ発射された弾頭はトバルカインを撃ち抜き、絶命させる。

否、絶命させる筈だった。

「かかった」

「……!?!」

絶命する筈であったトバルカイン。だが、そこにあるのは無数のカードによって崩れて行くハリボテ。本来の彼の姿は何処にもなかった。

ゆっくりと、崩れ落ちるハリボテの最後の一枚がアーカードへと風に乗るような緩やかさで流れる。

先程までのトランプによるものとは違い、ただのカードには短い走り書きがあった。

『最上階にて待つ』と。

S i d e — c h i g u s a

迫りくるグル共をレーザーで薙ぎ払い、最上階へと目指してい

く。本来なら入口へと向かい、脱出するのが筋なのだろうが戦いに巻き込まれるのはごめんだし、アーカードの共犯にされては堪らない。

なので私は現在フェイト達と一緒に屋上へと昇って飛行魔術で脱出する予定である。どの道ここに残ったのは警官隊を助けるためだったのだし、初めからグールになっていた以上ここには何の用もない。

屋上に二人が来るのはもう少し先だろうし、早いうちに逃げ出してしまおう。

……と、思っていたのだが。

「さあ歌い踊れ伊達男。豚のような悲鳴を上げろ」

今、まさに私の目の前で南米ボスとの決戦が繰り広げられようとしているのだった！

「ちょ、何なんだい！？ あの手！？」

後ろのアルフの叫びが聞こえたのだろう。二人はこちらに振り向くと、驚いたような顔をした。

「何故貴女がここに！？ 逃げるよう言ったではありませんか！！」

「成程。人間のようだが何故ここにいる？ いや、後ろの二人は違うな。私と同類……劣悪ではあるが……ふむ。どうやら一般人ではないようだ。」

婦警、遊んでやれ」

ちよっと待て——！！ 私には貴方と共闘してナチの野望を止める筈だったのに何で敵扱いされにやなんの！？ つうかよりも寄って新入り吸血鬼とはいえあのセラスとデストロイな対

決をしなくてはならないというの!?

さて、落ち着け宮本千草。まずは話し合えば……。

「らあああああああああああ!」

駄目でしたー!　なんか女性らしく可愛い叫び声を上げながら大砲みたいな銃をバンバン撃ってるんですけど!?　ていうかハルコンネンは流石にバリアジャケットを貫いちゃうって!!

『マスター今こそ若いだけの女に引導を渡す時です!　あの何でもデカけりゃ良いと勘違いしている巨乳に難癖付けて日頃の鬱憤を晴らしましょう!　私を差し置いてリア充化するなんざ断じて認めねー的な感じで!!』

「黙れバカ杖!　せっかく人が穏便に話をしようと考えていた時に水を差しやがって!　そもそも私はあの巨乳婦警の事なんざどうでも良いんだよ!　あの隊長は好みじゃねえし、鬱憤溜まってんのはお前だろうが!!」

『嫌ですねえ。私は鬱憤何か溜まってませんよ?　ほら良く言うじゃないですか“人の不幸は蜜の味”って』

とことん性根が腐ってやがるな!!　つうかフェイト達を避難させ!?

「不味い!」

「えッ!」

フェイトはともかくとして、アルフにそこまでの機動性は無い。獣としての俊敏性は高くともこの弾雨を潜れはしないし、何よりこいつらは人間でないものに容赦は無い!

絶望が脳裏をよぎる刹那、だが。

「なあああめえええるううううなああああ！」

その一瞬は、第三者の手によって食い止められた。

無数の弾丸を切り裂くトランプ。その大半は相討ちという結果によって消失したものの、この場にいる全員を護り抜いたという快挙を考えれば瞠目に値するものである。

「トバルカイン……なんで」

「兄弟子を死なせる程、私は人間であつた頃を捨ててはいない。貴女は知っているでしょうが、我が師は既にこの世に居ない。そして、流派を受け継ぐ者はもう私と貴女ほどの筈だ。

ここで貴女達を死なせる事は、マスターアジアに私が最強となるという誓いを立てた事を反故してしまふ。女性の一人や二人を護れぬような軟弱者に、最強を語る資格は無い！」

「成程。ならばお前は何だトバルカイン？ 化物の身でありながら人であつた事を忘れられないか？ その婦警のように」

トバルカインの発言が琴線に触れたのか、アーカードは僅かに怪訝な口調で問い尋ねる。

貴様はこちら側ではないのか、と。

その問いに、トバルカインは自嘲めいた顔つきで返した。

「いや。もう日の光なぞ当に棄てた。朝日に背を向けた者に、二度と日の光は戻らない。

そんなことは承知の上だ。だが――」

彼は語る。自分はもうお前と同じだと。取るに足らぬ化物だと言つた上で、今までの中で一番強い口調で言つた。

「——日の光を愛し続ける者を、こちらに引き摺り込ませはしない！ 流派東方不敗の！ キング・オブ・ハートの名に懸けて！
アーカードよ、貴様をここで討つ！ この者たちに手は出させん！」

手にしたトランプが輝きを放つ。夜を白に染め抜く光は右手に収束し、シャッフルの紋章をトバルカインの右手に宿す。

「これからが本番か。婦警、下がっている」

「チグサ殿。手出しは無用。ここはお下がりでください」

奇しくも両雄が言った言葉は同一。そしてその言葉とともに傍らに立つ両者もまた同時に下がる。

張り詰める空気。恐らくは最初で最後の一撃であり、決着も一瞬。故に、両者はこの場に於いて己の持ちうるカードを出す。

「拘束制御術式一号、二号、三号解放！」
クロムウェル

相手は鬼札いかな相手であろうと叩き潰せる究極の手札。
ジョーカー

何人にもかなわず、一切の慈悲も無く叩き潰す一手。

その手札を前に、トバルカインもまた手札をさらす。迎え撃つカードは最初から一つ。

唯一にして絶対。己が信じる最強のカード。例え力で押し負けようと、力に屈することなど無いと、その右手のみならず、総身が意志の光となって輝きだす。

「流派！ 東方不敗が最終奥義！」

闇の中、吸血鬼となって尚輝く黄金の光。それを美しいと、私は素直にそう思った。

「石波！ 天驚オオオけええええん
！！」

放たれる一撃は大気を震わせ、アーカードへと迫る。全てを飲み込む黄金の光。

何人にも覆せぬ純然たる一撃、あらゆる毒をもってさえ穢せぬ至高の光は、しかし。

「見事だ。お前が人間であつた頃ならば、私は倒されていただろう。だが駄目だ。

化物を倒すのは、いつだって人間だ。人間でなければ、ならないのだ！」

そう。アーカードが語る様に、化物は人間でなければ倒せない。人間としての心を棄てていなかったとしても、それは変わらない。

一度だって光から背を向けた者は——もう帰れないのだから。

漆黒が、黄金を飲み込む。

「あ……」

輝きが消えてしまう。

「駄目……」

日の光が、闇に溶けてしまう。この時の事は、後になっても思い出せない。

どうして私は、それを駄目だと思ったのだろうか？ 日の光から背

を向けた者。多くの犠牲の上に成り立つ化物。そんな彼を……。

「駄目エ……！」

……どうして、助けたいと願ったのだろうか？

私の叫びに振り替える両者と、セラス・ヴィクトリア。

即座に銃を構えるセラスをレイジングハートのモーニングスター形態で階下へと弾き飛ばし、トバルカインの血を微かに啜り取ったアーカードへと銃形態へと変形したレイジングハートで吹き飛ばす。咄嗟だった為に狙いが僅かに逸れてしまったのだろう。

身体の大半を失いつつも平然とした調子で微かに口元を歪めると、アーカードはやるべき事はやったと言うように階下へと落ちて行った。



「どうして、私を助けたのですか？ ……私は、化物なのに」
「判らないわ。ただ、必死だっただけ」

もうトバルカインは動けない。影によって肉体の三分の二を奪われ、微かであっても血を吸われたために最後の大隊の情報を与えてしまった彼は、間もなく処断されるだろう。

いや。処断の必要さえ無いのかもしれない。間もなく夜が明ける。日の光は吸血鬼にとっての天敵だ。彼はもう焼かれる事も無く、最期の時を迎える事になる。

誰から必要とされず、ただ……孤独なままで。

「申し訳、ありません。勝利を誓ったのに、負けてしまいました……」

「良いわよ、貴方は私の妹達を助けてくれたじゃない
化物であっても、人間の心のままでいてくれたじゃない」

上半身だけとなったトバルカインを抱え、静かに髪をなでる。

少しは気分が和らいだのだろう。硬いままだった表情にほんの少し、笑みが混じる。

「ふふ。しかしこうなることは判っていました。かつて師が亡くなった時、蝕まれた師を見て思ったのです。人は弱く、限りがある。達人と呼ばれ、最強の名を冠する者でさえ、時には勝てない。

ならせめて自分は最強であり続けたいと思った。我が師が、流派東方不敗こそが最強だと願いたかった。

ですが、私は間違えていました。人間であった時の弱さと共に、人間であった時の強ささえ置いてきたのだと。そんな事に、私は氣付けなかった。

チグサ殿……貴女に出会うまで」

「そんな事はないわ。貴方が私と出会ったのは一瞬よ？ それは貴方が初めから氣付いていたものでしかないわ」

「そうかも知れませんが……ですが、人間のまま強くなろうとする貴女は、かつて師と共に歩んだ私を思い出させて貰いました。

あの吸血鬼の言う通りだ。『化物を倒すのは、いつだって人間』人間で言う事に耐えられなかった弱い自分が、最強の化物を倒す事は出来ないのに」

「それでも……貴方は戦った。最期まで、戦い抜いたじゃない。

確かに負けたし、貴方は人間でいられなかった弱い化物かもしれないけど、人の心は、忘れなかったじゃない」

声が震える。自分は今どんな顔をしているのだろうか？ 少なくとも

も目の前の男性が困ったような顔をしているから、良い顔ではないと思う。

「私は……幸せ者ですね。化物に、そんなものは必要が無い筈なのに」

褐色の頬に、雫が落ちる。それが自分の流した涙だと判るには時間がかかった。

「最期に、貴女に頼みがあります。流派、東方不敗を、キング・オブ・ハートを貴女に継いでほしいのです」

私には……資格がない。流派東方不敗なんて、私は見たことしかない。

けれど、これが最期となるのなら、せめて優しい嘘で終わらせたい。

手渡されたランプを握り、力強く頷く。精いっぱい笑顔で、力の限り抱きしめて、最期まで嘘を貫こう。

そして。私達は日の出を見やる。訪れる朝を、最期となる暁を忘れないように。

「美しいですね」

「ええ。本当に綺麗」

身体が灰となり、末端から崩れて行く。不死である彼が、今朽ちようとしている。

「ならば……!」

こんなのは私のキャラじゃないし、私には似合わないけれど。

「流派！ 東方不敗は！」

それでも、この人には笑顔でいて欲しいから。

「王者の風よ！」

ほんの少し、ちょっとだけいつもと違う自分でいよう。

「全新！」

それは酷い偽善で。

「系裂！」

下らない自己満足かもせれないけど。

「天破侠乱！」

せめて、私だけは覚えて居ようと思う。こんなにも莫迦で愚直な化物を。人であった化け物を。

「見よ！ 東方は、赤く燃えているっ

！！」

そして、彼は事切れた。後には何も残らず、彼の身体は風に流され、朝焼けに溶けて行く。

フェイトもアルフも、一言も喋らない。私の後へと黙ってついて来る。

最後。一度だけ彼の居た場所を振り返るさんさんと輝く朝日を見

つめ、私は空へと飛び立つ前に静かに言葉を紡ぐ。

「A u f W i e d e r s e h ' n K a m e r a d (さようなら。
戦友)」

誰に届く事も無い言葉は、もう見えぬ彼と共に、風に流れて消えて行った。

002 吸血鬼とデストロイ☆ トバルカイン暁に死す!! (後書き)

おかしい……何故こうなった。

どうもc・m・です。第二弾投下です。

しかしギャグ全開で行く筈がなぜこうなったのか未だに判らない。
この手の熱血系は女の私にはあまり理解できない部分の筈なのですが……これじゃあ全然タイトルと合ってない。

本当に何でこうなったんだろう？ これではナチと共にアーカード打倒ルートが確定してしまう……。

トバルカイン自体さっさと死ぬ筈だったのに、トランプと言うだけでシャッフル同盟の紋章と東方不敗の継承者という謎すぎる設定に……。

……つうかトバルカイン漢すぎんぞ。

今回はこそはギャグで進めたいです。ちゃんとタイトル通り進めます。

第三話『新たな仲間を求めて！ ようこそ！ わくわくマスコット村へ!!』

どうぞ期待下さい！

003 新たな仲間を求めて！ ようこそ！ わくわくマスコット村へ！！

漂う暗雲は村を包み、鴉は死肉を啄み、不快な音色を囀るのみ。草木の無い荒れた地。所々に漂う煙は、この住人の吸う大麻か煙草か、或いは単に暖を取っているのか？ いずれにせよ鼻につく悪臭はそれら全てを混ぜ合わせているため、意味は無い。

屋台の店主は群がる孤児を追い払い、宿らしきものの二階では博打に勤しむゴロツキが犇めき、道端に倒れた死体や首を吊るした者に見向きもしていない。

ここに居る誰もが、それを日常として疑わない光景。地の果てと呼ぶにふさわしき景色がここにはあった。

この村の名は――

「これのどこが『わくわくマスコット村』なのか教えてほしいわね」
『嫌ですねえ。バイオレンスにワクワクしてしまうDSなマスターには打って付けじゃないですか。もう十人目でしょう？ 村人もビビって部屋の隅で震えてますよ』

「ち。根性無しが。マスター。景気づけに良いのを」

「へ、へい！」

ちなみに私がマスターと呼んでいるのはレイジングハートのように主人のマスターではなく、この居酒屋の主人の事である。念のため。

『けどマスター。何だってジュエルシード二つも消費してこんなシケた村に？ あのマスコット以外にも戦力的に強いのはいるでしょう。』

それともあれですか？ 今更マスコットさえいれば萌え路線でも行けるんじゃない？ 的なバカな事を考えていませんよね？ いい加

減嫁ぎ遅れのババアであることの自覚を、』

取り敢えず聞きなれちゃったレイジングハートの毒舌を無視してこれからの事を考える。

流石に次元を超えるのは多大な負荷がかかった為二個もジュエルシードを消費してしまったのは痛い。

しかもそれが往復ならまだしも片道、つまり変える時も含めれば計四個のジュエルシードを消費してしまう訳である。

ちなみにここにアルフやフェイトはいない。幾らなんでもいたいけな妹達にこんな世紀末救世主が出てきてしまいそうな世界を見せるのはきついからだ。

つか女と知るや襲いかかってきやがって。そういうバカは一人残らず玉を潰してやったが、流石にあのマスコットが来ないので仕方がない。硝煙と血の渦巻く宿屋に足を運ぼうと、腰を浮かせようとしたところで。

「まちなお嬢さん。もう一杯付き合わねえか」

その声に思わず振り向く。

ダンディズムあふれるジョージボイス！ お腹にある『パ』の焼印。他のマスコットと同じ体型ながら何処か一線を画した威圧感と額の角。

間違いなくこのマスコットは！

「貴方がパヤたんね？ 丁度良いわ。ここの男共はエスコートが下手だったけど、貴方はどうかしら？」

「男を試すとは悪い女だ……親父。このお嬢さんに一杯。何時もの奴だ」

「マスター。私からもこの紳士に一杯お願い。さっき私が飲んでたやつよ」

「わ、判りやした！」

カウンターに滑らかに滑る湯呑みとグラス。私は彼から『コーヒーマイルク』彼は私から『ドクダミ茶』を受け取る。

「なあお嬢さん。そんな悲しい目をしてたんじゃ、この村の連中にはカモにしか映らねえ。早いとこ村を出た方が良いぜ」

「貴方が付いて来てくれるなら、すぐにでもこの町から出るわパパたん。」

いえ。『パヤ・リビングストーン大佐』」

瞬間。先程まで落ち着いた瞳が鷹のように鋭い物に変わる。一応忘れて貰っては困るがこいつはマスコットである。

「昔の話だ。今はここに居るゴロツキ共の兄貴分だな。その噂を知ってるってことは、あんたも俺をマスコットにしたいって口か？」

生憎、強引に従わされんのは性に合わん。他をあたってくれ」

「確かに、貴方に無理に来て貰うのも虫が良すぎるわね。」

けどこれだけは聞いて。私は貴方を従属させたい訳じゃないの。確かに一方的かもしれないけど、私は下に着かせるのではなく、一緒に歩く仲間が欲しいの」

「つくづくこの村には合わねえ女だ。あんたには南のルンルンマスコット村が合ってるぜ。」

これは蔑んでるんじゃないわ。単純にこの村の住人とアンタじゃ釣り合いはとれねえ。眩し過ぎんのさ、アンタは」

しばしの沈黙。グラスの中に入ったコーヒーマイルクを口に含むと、一拍置いてグラスをテーブルに置いた。

「そんな綺麗なもんじゃないわ。バカな女が、出逢って間もない男

の為に動こうしているだけ。それも、自分の力じゃ足りないからって、別の男を巻き込んでる。

ホント。酷くて汚い女よ、私は」

微かにうつむいた顔の私に、彼はドクダミ茶を一気に飲み干し再びこちらを見る。

「ふ。目を見りゃわかるぜ。アンタはその男に惚れてねえ。

本当に汚ねえのは有無を言わず連れてくようなのを言うもんだ。泣き落としてもせずにこんな腐った村にのこのこと来て、出逢って間もない男の為に頼み込んだ。誇って良いぜ。アンタは眩しい。そして、だからこそもう一度言わせて貰う。

帰りな、お嬢さん。アンタみてえなのは俺どころか村の餓鬼でも眩しすぎるのさ。太陽を見つめると目が灼けちまう。もう少し汚くってから逢いに来な。そんなときや協力してやる。少なくとも、マスコットにするのは俺を倒さなきゃならねえ。それが掟である以上、今のあんたに俺は無理だ」

一度として振り返ることなく背を向けて去ろうとする彼にこちらも立ち上がる。だってまだこちらの言いたい事は終わってないのだから。

「そう。残念ね」

「なに？　グボハッ……………！！！！？」

二リットル近い血を吐きだしながら地面との熱いベレーを交わすパヤたん。

愚か者め。こうなる前に言う事を素直に聞けばよかったものをっ！！？

「グフツ……!?!」

口から溢れる血に思わず膝をつく。この野郎! まさか私と同じ手を!!

「ふ、ふふ……。以前、銀髪の穿いてないシスターにやられた事があってな。まさかあの時と全く同じ手を打ってくるとは思わなかったが、前言撤回だ。アンタはこの村でも充分に生きていけるぜ」

くそ。ジョージつながりとはいえ、あのシスターこんな所にも来て居やがったか! あの女にとってマーボー神父と同じ特徴を持つ男は全て敵なのか!?

「流石に……ドクダミ茶はストレートすぎたわね。けど、貴方の毒後持って三分よ。カップラーメンが出来る時間でお手軽殺人が完了しちゃうけど、どうするの?」

「はっ、はは。いい度胸だ、俺も同じぐらいの時間でなあ……ここに解毒剤があるんだが、交換しねえか?」

「そうね。共倒れは避けたいし、良い? フェアに行くわよ?」

「アンタこそイカサマはなしだぜ?」

互いに口元から血を零しつつ両方の手を握る。1・2の、

「「3!?!」」

両者、解毒剤のカプセルを掴み、そのまま頭突きを敢行。岩盤を砕く頭とのことだったが、生憎と局部鍛錬は空手の常識。多少の痛みはあったものの、現役時代は骨が見えるのではないかと言うほどに砂袋へ五体を叩きつけた私への決め手としては威力が低い。

「ヌウッ……！」

「どうしたのPAYたん？ 汗が冷たいけど」

冷笑もそのままにPAYたんの腕を取り、地面へ叩きつける。

「く。詰めを誤ったな！ この俺に関節技は！」

「効かないんでしょう？ 全身の関節が360度稼働する特異体質。けど、私には関係ないわ」

「なに？ ま、まさか貴様！ その体勢から！？」

そう。今の自分はPAYたんを押し倒し、馬乗りになるような格好だ。

片腕を足で固定している為、うつ伏せになる事も出来ない。つまり、事実上仰向けになる形で拘束されたことになる。

そして、この体勢から放つ尤も恐ろしい技。それは。

「私の正拳は瓦十四枚を破壊するけど、貴方の人中はそれに耐えられるかしら？」

「この女アアアアアアアアアアアアアアアアア！」

正確に。私は宣言通り、正拳下段突きを叩き込んだ。



「ぐ、ぐがげ、ガハッ……！」

「では宣告通り、マスコットになって頂戴」

陥没した顔面を気にも留めず、要件を口にする。どうせこの男は

すぐに復活するからだ。

「ち。仕方ねえ、マスコット契約書を出しな」

思った以上に手早く片づいたな。あとは。

「さて。そのマスコット、私が貰おう」

「田中ぶにえ……」

金髪碧眼の美しい顔立ち。線の細く、だが華奢と言う訳ではない引き締まった体。

大抵の女性が憧れるだろうスレンダーな身体はしかし。全身を覆う漆黒の戦装束の前に華麗さを潜ませ、彼女自身の持つ暗黒面を余すところなく剥き出しにしていた。

「聞こえなかったか？ そのマスコットは私が貰うと言ったのだ。我が元へ来い、パヤたん。立身栄立は思うがまだまだぞ」

「生憎と宮仕えは性に合わねえし、何より俺は先約があるんでな。それにアンタの下に着くより、このお嬢さんと組んだ方が楽しそうだ。悪いが他をあたって、」

「ならば死ね」

実に簡潔に言い放った一言と共に頸椎を砕きにかかる。尤も、そこにたどり着くのに、私を忘れて貰っては困るが。

「何の真似だ？」

立ちふさがる私に問う田中ぶにえ。だがそれは愚問でしかない。

「それはこちらの台詞よ。まだマスコット契約書にサインしていない

いとはいえ、勝者は私。

この男をマスコットにしたいのなら、私を倒しなさい王女様」

「ふ、ふはははは！ 私を王女と知って戦うか！ 他に幾らでもマスコットはいると言うのに！ 交渉で何かを望むでもなく？」

「お断りよ。私は少しばかり欲張りだね。自分で決めたものは手放したくないし、手にしたものを壊されるのは嫌なの。

だから貴女、ここで消えなさい」

「面白い！」

怒号と共に弾けるように突貫するぷにえのタツクル。組技を主体としたそれは空手家の様な打撃を前提とした相手には最も相手をしてたくないスタイルである。

「シッ……！」

その突貫に対し、こちらは右背足による下段廻し蹴りを放つ。相手の突貫をミサイルとするならば、こちらは迎撃を行う機銃。先の下段蹴りから繋げるように、拳の連撃を放つ。

「舐めるなア！」

重く鋭い空手の連撃。だが田中ぷにえはそれを掻い潜る。空手家に限らず、武道家に無く、格闘家にあるモノ。

コンビネーションブローという近代格闘技の技術を認めぬ武道には、重さや鋭さとは違って隙間の無い連撃と言うモノは存在しない。故に、もし一発でも掻い潜り、或いはしのぎ切る事で懐に入ったならば、ぷにえの持つ関節技は容赦なくこちらへと牙を剥く。

そして、ぷにえは見事こちらの連撃をしのぎ切った。

青あざを作り、肋に亀裂が走って尚こちらに向かうと同時、タツクルによって地面に押し倒す。否、押し倒そうとした。

「なに!？」

「驚く事でもないでしょう。私は空手家。重心移動と支えは万全を期す必要がある。加えて、」

直後、ホールドしたぶにえの身体が宙へと舞う。腕を胴体へとロツクしたままで。

「内股!？」

空手には無い、柔道の技。オリンピックなどでもよく目にする技だが、身長の高い選手であれば大外刈りや払い腰などに並んで使用されるポピュラーな技でもある。

「手を離しておきなさい。頭から落ちれば、死ぬわよ」

「——ッ!？」

一拍を置いて地面へとぶにえの身体を叩きつける。恐らくはきちんと受け身を取ったのだろう。すぐに体勢を立て直すべく起き上がろうとするが、片膝を立てて立ち上がり切る前に大外刈りで地面に押し倒し、腕ひしぎ十字固めを完成させる。

手を伝って感じる相手の汗、ここで肘を碎けば確実に勝つ事が出来る。だが、こちらはあえて拘束を解くと、再び一定の距離を保つ。

「なぜ……外した？」

「何。余力を残したまま勝敗がきまるのは避けたいでしょう？ それに、関節をかけて倒したのは、完璧な勝利を奪うとは言えないわ。

『打撃系など華拳繡腿。関節技こそ王者の道』貴女はそう公言しているようだし」

下らないとばかりに吐き捨てるこちらに、ぷにえは静かに問いた
だす。

「故に、私を打撃で倒すと？」

「然り。けどそれだけではないわ。貴女、フイスト・オア・ツイス
トと言う言葉を知ってる？」

かつて異種格闘技戦が勃発し、以来百年近い時の中でテーマと語
り継がれたもの。強いのは拳フイスト ツイストか関節技か。

「つまり、私とお前で決着をつけたいと？」
ツイスト

「そうよ。けど、」

一拍を置き、相手を見据える。

田中ぷにえ。関節技を極め、それを信仰とした真なるサブミッシ
ョン使い。僅かにでも意識をそらせば、この五体は有り得ない方向
に曲がる。そんな中であって尚、私は不遜に笑みを零す。

「勝つのは私よ」
フイスト

「いいや私だ」
ツイスト

互いに修羅の笑みを浮かべつつ、お互いに構える。

田中ぷにえは深く身をかがめ、いまにも跳びかからんが如き体勢
を立てる。

キャッチ・アズ・キャッチ・キャン。別名ランカシャー・スタイ
ル。

「まさか。テレビ以外でそのスタイルを見るとはね」

関節技の集大成にして極地。

文字通りの全身全霊を以て対する相手にこちらも一礼の後に息吹きを行う。

「空手の呼吸法か。目の当たりにするのは初めてだ」

「良い貌よ、貴女」

息吹きと共に猫足立ちの姿勢に映る。これより先に言葉は不要。肉体言語にて語るのみ。

「せいッ！」

先程とは逆に、こちらが先制をかける。全体を様子見する為の下段廻し蹴り……に見せかけた外廻し蹴り。

空手の素人であるならば決して防げぬとさえ言える一撃はかし。

「甘い！」

ぷにえの前には無意味だった。

こちらの放った蹴りを片腕でブロックすると同時に残された足を払う。そして地面に倒すと共にアキレス腱を固めにかかる。

「させるか！」

完全に極め切る前に残された足で顎を蹴り、脱出と同時に体勢を立て直す。

微かに関節が痛むのは極まりかけていたからだろう。後一秒でも遅ければ関節は破壊されていた筈だ。

そして、不完全な体勢とはいえ私の前蹴りを受けた以上は、相手もただでは済まない。

私の蹴りを受けて顎が外れなかったのは、ダメージを考慮して自ら極めかかった関節を手放したためだ。そうでなければ両者ダウンとなっている。

「凄い脚だな。いや、脚だけではない。手も、肘も、頭部も、全てが通常のそれではない」

「当然。こちらら社会人になってさえ年中砂袋を叩き続け、型稽古を一日たちとも欠かさなかったんだからねェ！」

積み上げた研鑽と日々の鍛錬。片時も休まず、時間が無い時はその密度を濃くする事で埋め合わせた。

彼女がサブミッションを信仰するように、私もまたこの五体を信仰している。

故に引けぬ、負けられぬ。ここで引くことはすなわち、空手に背を向けると言う事なのだから！

「私とて！」

そして、だからこそ彼女もまたこちらの速度に肉薄する。引き離し、一定の距離を持ちたい私を読むように掻い潜り、伸びきった腕の肘を、或いは膝を碎きにかかる。

「一日とて、鍛錬を欠かしたことはない！」

スタンドからのサブミッション。一挙動で済む打撃に対し、掴み、技をかけると言う二挙動が組技が、その隙間を埋めるべき編み出した関節技。

レスリングという技術体系にありながら、日本古武術や柔術に近いその技は彼女自身のアレンジによるものだろう。

故に私は喜ばしい。故に私は憎らしい。

先の頃と同じく突貫するぷにえ。そしてそれを先と同じく下段廻し蹴りで仕留めようとする私。何もかもが同じであり、それ故に僅かながらの諦観と疑念が脳裏をよぎる。

そして。疑念は正しかった。

「なッ!？」

驚愕に値する。当たると確信した距離。背足が確実に側頭部に触れるという距離にあった筈の側頭部が微かに爪先が掠る程度の位置にしかないという事実。

彼女の狙いはその足首。背足を掴むと同時に全体重をかけて捻ると、そのまま足首の関節を砕き切った。

「グアアッ!？」

灼ける痛みとぶちぶちと肉の断線する音が響く。

「勝った」

「そうね……試合だったら、貴女の勝ちよ。けど」

これはルールの無い闘いであり。

「この瞬間。貴女の敗北は決定した」

「しまッ!？」

砕かれた足に意味はない。何なら膝も持っていけばいい。だがそれは無意味だ。ぷにえが足首を極めると同時に腹筋をする要領で起き上がり、そのまま右の正拳を叩き込む。

「ガハッ……!!」

既にひび割れた肋は、今度こそ正拳で完膚無きまでに碎き切った。おそらく、今の彼女の肋は蜘蛛の巣状に碎けている事だろう。かつて私が試合をした相手に深手を負わせた時と、同じ手ごたえが拳に残っているのだから。



暗雲から滴る雫。乾いた大地が泥になり、衣服を汚していくが、今の私達には気にならない。

尤も、正確には気にした所で殆ど動けはしないのだが。

「負けたのか……私は？」

「そうね」

大の字になって空を見上げるぷにえ。その顔には悔恨の念は無く、むしろ何処かすっきりとした顔をしていた。

「……お前の勝ちだ。あのマスコットは持っていけ。それから、もうひとつ」

「ん？」

言うべきかどうか悩んでいると言ったところなのか、何処か戸惑いがちにこちらを見ると、やがて決心したように口を開く。

「私がお前を倒すまで、最強で居続けろ。それが義務だ……そして私が玉座に着いた時にはお前を倒し、我が妃とする」

は？

「すみません、ぷにえさん。聞き違いでしょうか？　いま妃とかつて言いませんでした？」

「当然だろう。王家にとって死も敗北も同じ事。だが身内となれば例外だ。」

現にわが父は母に勝ち王となった。……勝ち方はどうあれ、な」

「その言い分だと勝っても王様で負けても妃になってしまうのでは？」

「そうなるな」

「キャンセルは？」

「不可に決まっているだろう」

いやだー！　私に百合属性は無いんだよ！　フェイトと言いつ子と言いつ、どうして私の周りには百合の花が咲く連中しか集まらねえんだよ！　私はシヨタツ子のハーレム王国を作りたいのに――

――！！

『あー……マスター。すっごく不服そうな顔をしてるところ悪いんですが、あのマスコット、逃げてるみたいですよ？』

「何い！？」

『やはり息の根を止める手前の一撃を出さなかったのは失敗でしたね。あのマスコット、三キロぐらい離れた地点でへりに回収されかけてますよ？　ここは前回使った光線銃でちゃっちゃと始末しましょう！　Let's Kill Them All！』

「協力しよう。あの似非ほ乳類、景品の分際で逃亡を図るとは」

息の合いまくった一人とバカ杖。本来ならドン引きするところだが、逃走を図った以上は私の敵である。

「私達の合言葉は？」

『もちろん』

「決まっている」

シンクロ率四百パーセント。某管理局の白い悪魔にさえ勝てそうな魔力が収束し、一点に狙いを定める。

さあ。素敵に愉快にデストロイよ☆

「『リリカル・トカレフ・キルゼムオール！！』」

発動キ―と共にそれぞれの杖が砲撃体勢を取る。直後、放たれた魔砲（誤字にあらず）は村を飲み込み、山を砕き、はるか先までペンペン草一本生えない荒野に変えつつ、パヤたんの乗ったヘリを撃墜した。

003 新たな仲間を求めて！ ようこそ！ わくわくマスコット村へ！！

えー……前回の次回予告に書いたとおり、大魔法峠でございます。しかしギャグ分が少ない。しかもパヤたんよりぷにえとの戦いの方が圧倒的に長い。

そして作者に百合属性は無いのにフラグは立つ。

もう何が何だか……。

ちなみに今回の話で突っ込まれそうなので書きますが、空手にも組技があります。

ありますが、ぷにえの専門が組技（主にサブミッション）なので、敢えて打撃対関節を判りやすくするために空手の組技を外しました。柔道の技を使ったのは、こっちの方がポピュラーだと思った為で空手の組技を知らないからではありません。念のため。

あ。ついでに余談ですが、作者は柔道と空手の経験があります。一応小学校から空手を始めて中学で剣道、高校で柔道という女を棄てた人生を歩んでおります。

（ちなみに空手だけは今も続けていたりします）

今回はタイトルは未定ですが、ナチの『最後の大隊』に向かう予定です。

ちなみに今回はシリアスは欠片ありません。ギャグオンリーで行きますのでそのつもりでお願いします。

それではまた次回にお会いしましょう。

004 突撃！ ミレニウム！ くコミケの一般参加は修羅道ゆえく

はあい！ 皆さんお久しぶり！

私の事覚えてる？ そう皆のアイドル、

『嫁ぎ遅れのババアですね。判ります』

ごしやり。

さて、毒舌なバカ杖には黙って頂いたところで、現在私は新たな仲間としてジョージボイスのマスコットとフェイトちゃん達と共に、南米に來ています。

「けど姉貴、何だってこんなだっ広い森の中を延々と歩いてるんだい？」

確かにアルフの疑問も尤もで、本来ならこんなトコには一秒だっ
ていたくない。

居たくないんだけど……。

「HPにはここだって出てたからねー……」

まさかミレニアムの連中がHPを出してるとは思わなかったわ……。

「まあ良いじゃねえか。それより姐さん、そろそろ見え、」

「私のお姉さまに一メートル以内に近づいたら殺すって言いましたよね。疑似哺乳類」

「までツインテール！！ ヤンデレブームはとっくに過ぎている！

！それに久々の登場で初っ端から退場はきつい！！
取り敢えずこの光ってる鎌をしまってください！！」

しまつてあげなさい、という私の言葉に素直に従い、フェイトちゃんは大バディッシュを下ろす。

このマスコット、私のヘリごと撃ち落とされた恨みから最初は私の命を狙っていたものの、下手に手を出せばフェイトちゃんに殺される事を悟った為に、今ではすっかり従順な下僕と化していた。

「見えたわ」

言葉と共に一同は正面を向く。目の前に見えるのは恐らく見張りであろう、ナチの服を着た二人の男の姿があった。

「予定通りに行くわよ」

了解、という言葉と共に全力ダッシュ。無論それに気付かぬ筈もなく、男二人は銃を向けようとするが、

「すみません、一枚良いですか？」

「あ。どうぞ」

「ポーズ取りましょうか？」

「お願いしまーす！」

にこやかなスマイルを浮かべ、ポーズを取る兵士二人。

うむ。写真撮影のマナーにして基礎。撮る前に言わなくてはいいけないお約束の言葉である。

「——って、まで！？ どうして此処に来た！？」

「HPで告知を見たんですけど、求人空きってまだ大丈夫ですか

？」

「ああ……そういえば少佐殿が出していたな。それなら良い。面接官であるヴェアヴォルフは中だ。今ハッチを開ける」

そう言いながらレバーを下ろすと、地下に通じるゲートの扉が開き、巨大な飛行艇が露わになったんだけど……。

「セイバーさん！？ 何でナチ服着てるの！？」

でかでかと飛行艇に張り付けられたコスプレセイバーが、ご丁寧にナチス式敬礼までかましていた。

「驚かれましたかな？ 我らが少佐殿とドクはセイバーの大ファンでしてね。

デスクトップの壁紙を魔改造するだけには飽き足らず、一から同人ゲームや同人誌を書き、最終的には飛行艇に直接手書きで一から書き続けていましたよ」

何という歪んだ愛情……ちなみに製作期間は半年でその間一睡もする事無く、雨水で飢えを凌ぎながら書き切ったらしい。

ただ最後まで帽子を被らせるかどうかでもめており、

『あのアホ毛無くしてセイバーは語れねえだろ！！』という少佐と『帽子かぶったセイバーが見たいんだよ！！』というドクが互いに殴り合い、最終的に飛行艇の両側に帽子の着脱別バージョンを書く事で決着したとの事。

『才能の無駄遣いですね』

今回ばかりは、レイジングハートの言葉に一同は頷くのだった。



「さて、入り口に着いたのは良いんだけど……」

なんだろうね。これ……。

「さあ、やってまいりました第一回、最後の大隊採用試験！ 少佐の『セイバーは俺の嫁』発言からHPは炎上して消え掛けていたにも拘らず来てくれてありがとう！

試験官は僕、シュレディンガーが務めさせていただきます！！」
「ていうか、何で君メイド服！？」

やべえ、凄いい持ち帰りしたいぞこの野郎！！ ネコミミでショタでメイドとかどんだけポイント高いんだよ！？

ショタコンの私の理性が臨界点を突破しそうだZE！！

これは何としても大隊に入らなくては……！！

『マスター。その気持ち悪い息使いを止めて下さい。周りがドン引きしますから』

「これは大隊が満場一致で決定した僕のコスです……不本意なのであまり突っ込まないで下さい」

内股でスカート押さえてモジモジしてんのが堪んねえ……！！
首輪付けて命令とかしたい。

「OK！ 判ったから試験問題をプリーズ！！」

この私の理性が大気圏を突き抜ける前に、さあ早く！！

「では、ここに居る全員でハレ晴レユカイをノーミスで踊って下さい！」

スタート！！」

言うや否やメロディが大音量で流れる。

しかし甘い。そのパターンは予想済みだ！！

「フェイト、アルフ、行くわよ」

「はい、お姉さま」

「任せな、姉貴！」

ふっふっふ！ この日の為によくつべとニコ動で散々動画を見まくった甲斐があったわ！！

フィリピンの囚人に来て私達に出来ない事は無い！ 残念だったなミレニウム！ この勝負、貰ったぞ！！

「失格！！！」

瞬間、パン！ という銃声と共にジョージボイスのマスコットの眉間に銃弾が突き刺さった。

「しまった！ そういえばこいつはパーティに入れて日が浅かったんだって！！」

「ああもう！ だからお姉さまの邪魔にならないようパーティから外そうとしたのに！！」

なんで『そいつを 仲間からはずすなんて とんでもない』って出てくるの！？」

ガッテム！ 戦力強化が結果的に足手纏いを生んでしまうとは！！

「うーん……仕方ないですね。取り敢えずお引き取りを……あ、ちよっと失礼します」

そういうと無線機から応答があったのか、シュレディンガーちゃんはこちらから視線を外す。

「あ、少佐。どうしたんです？ え？ 今回はロリが来たから許す？ 良いんですか？ あ、はい。判りました」

「……大体判るけど、どうしたの？」

「いえ、実はさっきの踊りの映像が流れてて、少佐を含め、今のミレニアムにロリが居ないのが痛く不満だったようで、もう一回はチャンスを与えても良いとの事です。

ただし、そちらの子には強烈な萌えを見せてくれれば、との要望が」

強烈な萌え……やはりあれしかないか。

「フェイトちゃん、デバイスを起動させてセットアップしてくれる？」

「あ、はい。バルディッシュ、セットアップ」

さあ男共よ、画面に釘付けになるが良い。そして脳内ブルーレイに永久保存するが良いわ！

あ。映像保存は絶対させねえから。私の妹分の身体を余すところまで眺めたかったらフェイトに直接告ってOK貰ってこい。

『と、いうわけでレイジングハート。妨害電波よろしく』

『念話で言わなくても……まあ私もキモメンの男共が画面に釘づけになってると思うと吐き気を催すので構いませんが』

という訳で変身シーンも終了し——今回は下着が見える程度に留めて置かせた——遠くからでも聞こえる男共の息の粗さにキモさを感じながら試験再開。

「ええっと……少佐から一言、GJ！　だそうです。あと、その服装のままでいて欲しいと」

くたばれペド野郎。

「えー……ではボーナスにトライ！　我らがミレニアムの指揮官にして総統代行、少佐の嫁は？」

！？
それここで口にすんの！？　　っーかあの人どんだけ好きなんだよ

「……セイバー……？」

「せいか、」

『ふざけんじゃねえぞ！！　　セイバーは私のだって言ってるでしよ
うがア……！！』

無線機から響く大音量。多分ドクだな。間違いない。

「えっと、通っても良いかしら？」

「はい、どうぞ」

如何にもこれ以上はやる気はありませんといった感じで退場するシュレディンガーちゃんに、次にあったならば絶対に首輪をつける事を心に誓いつつ、私はゲートをくぐった。



「写真良いですか？」

「あ。前回の巻ってまだ置いてます？」

ざわめく喧噪。リュックを背負った男たちが汗を流しながら艦内を闊歩し、その両手には紙袋を抱えていた。

「どう見てもコミケ会場。なに！？ ミレニアムってサークル名か何かなの！？」

『そうみたいですわー。入り口で貰ったパンフレットによると、一番奥で同人誌出してるみたいですよー』

レイジングハートの言う通り、パンフレットの見取り図を頼りに奥まで進む。

けど……。

「セイバーはあ……俺のだって言っただろう……！！！！」

「いいやッ私のだっていったでしょううううう——！！！！」

全身から汗を滲ませた馬鹿二人がむさ苦しい取っ組み合いをしているのだった……目に毒にも程があるわ。

しかし、どうしたものか……あ。立ち読み用はこれか。

取り敢えず仕切りに分けられているようなので少佐のコーナーの方を手取る。

タイトルは『第四次聖杯戦争〜鉤十字の指揮官〜』。
なんかまともそうなタイトルなのが気になるので読んでみた。



第四次聖杯戦争。かの冬木の土地によって行われる魔術師たちの戦争は、一人のイレギュラーを呼び寄せた。

戦争に魅せられ、飽くなき闘争を望むモノ。最後の大隊、ミレニアムの少佐に令呪が刻まれたことにより、彼らは人知れず冬木へと潜行する。

無論、令呪を宿したからと言ってそれだけで戦争を勝ち抜く事は出来ない。

聖杯戦争に参加するには、従者である英霊であるサーヴァントを召喚する必要がある、彼らを喚び出すには、触媒が必要となる。

故に、ミレニアムは永遠の命という餌をぶら下げる事でイギリスの発掘隊を買収。

コーンウォールから、かの騎士王の鞘を持ちだした。

とはいえ、その道中は安易な物ではなく、護衛についていたゾーリンと聖杯戦争に参加する御三家の一派たるアインツベルンの従者が衝突。

結果として鞘は持ち帰る事が出来たが、発掘隊と護衛のゾーリンは死亡した。

そして決戦の日の一ヶ月前。冬木の地にて、少佐は儀式を成功。儀式によって召喚されたアーサー王が女性であった事に多少は驚きつつも、戦場に立つ者に貴賤は無いと認め、正式な契約を行う。だが、この二人の関係はすぐさま劣悪な物となる。

『聖杯に託すべき願いはあるのか?』

というセイバーの問いに、少佐は、

『手段の為ならば目的を選ばない。我々は一心不乱に舞台で踊り続けるだけだ』

と答え、場合によっては民草さえも犠牲にする事を厭わぬ姿勢から両者の中は完全に決裂。

令呪とパスは繋がってこそいるものの、二人は完全に別行動を取るようになった。



その後、ついに戦争は幕を開ける。

人知れずに行われる戦争。魔術師たちの戦いにミレニウムは進撃する。

神秘の無い存在は、英霊には届かない。銃も、ナイフも、爆薬も、全ては彼らに届かない。

だが、ここに一つの例外がある。『吸血種』という存在そのものが持つ歴史と神秘。

人工の存在故に本物とは格が落ちる物の、彼らは紛れもない吸血鬼である。

そして、ナチスの残した遺産も、ここに来て功を奏した。

ヒムラーの神秘主義。大戦中においてはオカルト遊びにすぎないものであったモノの、吸血鬼の部隊を作る過程で手に入れた魔術の研究も、時と共に発展していった。

魔術儀礼を施した弾丸と爆薬。神秘そのものに於いては薄いものの、防衛線を繰り広げるだけなら可能であり、あとはサーヴァントに使用するだけの段階となった。

そしてセイバーは魔力が乏しい中でランサーとの初戦を送り、間に入ったライダーに対して一時休戦の状態にされるも、アーチャーが現れた事で事態は一変するも、そこで事態は一変する。

ミレニアムはその場で監視員を送っていたが、本来、遠坂邸に於いて破れた筈のサーヴァント、アサシンを発見するや否や、戦闘を敢行。

本来存在が抹消された筈のアサシンを衆目の目にさらし、事態の主導権を教会から離すだけでなく、銃では斃せはしなかったものの、撤退を可能にしたことから、対魔術の低いサーヴァント相手であれば傷付ける事も可能という結論に至るといふ、一石二鳥の状態を少佐は作り上げた。

そして、少佐とミレニアムは本格的な行動に移る。

言峰協会へ刺客を送り、監督役である言峰璃正を暗殺。

全体に混乱を引き起こさせるうちに、ランサーのマスターが本拠地を構えるビルに認識阻害の術式を付けたV2ロケットを発射。

結果として仕留める事は出来なかったが、これを機に全マスターに宣戦を布告した。

無論、ここまでして協会と教会は黙ってはいない。

土地の監督者である遠坂への非難もあったが、それ以上に協会と教会の面子もあったのだろう。

両陣営は今回の聖杯戦争を一時中断し、全マスターに協力を要請。事態を收拾させる為、冬木に不発弾が発見されたと誤情報を流し、民衆全員を別の都市に避難させると同時に、大規模な代行者と封印指定の執行者を送りつけた。

だがその魔都にあって、彼らは未だ事態を完全には掴めていなかったと見るべきだろう。

魔術と聖堂、両陣営に全く関わりの無い殺人鬼がマスターとなっ

ている事を。

雨生龍之介。幼子の命を狩り続ける殺人鬼。そのサーヴァントもまた、過去の猛執に囚われた異端者、ジル・ド・レエである事を。冬木の地、かの騎士王を聖処女と勘違いしたジルは此度の戦争の一時中断の情報を入手すると、教会と協会に聖処女の奪還を阻止されたと勘違いして怒り狂い、魔術によって悉く両陣営を撃破。

最終的に港に巨大海魔を出現させ、両陣営を完璧に飲み込むと、セイバーを探すべく街へ出る。

一方セイバーは此度の件をランサーから聞きつけ、自身のマスターに怒りながらも、事態を察知。

キャスターの海魔の圧倒的な質量と魔力の供給問題に苦しみ、万事休すかと思われた際、彼らは現れた。

褐色の狂気。黒衣と髑髏を纏い、欧州を包む炎たる一団の残滓。
ラスト・バタリオン。『ミレニウム』

少佐による指揮の下、彼らは港に集結した。

当然、セイバーからしてみれば納得がいかない。民草を巻き込む事を肯定し、事実マスターを倒す為だけに民間人を巻き込んだ者が、今更どうして自分を助けるのかと。

しかし、その問いに少佐は笑って答えた。

『戦争こそ我々が望むモノ。しかし必死に守る筈だった女子供が殺されるのは、とてもとても悲しい事だ』

戦場に於いて民間の犠牲は当然に出る。しかし、戦場に於いて殺す事だけを目的としたモノが戦争を騙る事は許さない。

『戦争とは闘争だ。一方的な虐殺は確かにあるし、それは我々の一

部も行った。

だが、闘争の無い戦争は戦争ではない。理念も主義も無い闘争は暴力だ。

実に醜い。これは戦争では無い。良いだろう、戦争の根幹をアマチュアに叩きこむのは我々の役目だ』

言葉と共に、彼らは進軍する。発射される夥しいロケット弾と機銃掃射。

攻撃を受ければたちどころに再生され続ける海魔に、その攻撃は効果が無いとセイバーは進言する。

だが、少佐はその言葉を聞き流す。

戦で散る相手には多少の華を持たせてやると。

そして、役者は出そろった事を告げる。

魔の獵師、ウィップバーン。

伊達男、トバルカイン。

そして正統なるベアヴォルフ、『ミレニウム』が最高戦力、大尉。

ウィップバーンによって放たれた銃弾は数キロ先のマスターである龍之介を撃ち殺し、そのまま返す刀でキャスターをも討ちとる。

キャスターが崩れ落ちるさ中、トバルカインの無数のトランプが海魔を駒切りに斬り裂き、狼へと変化した大尉が魔力の根幹である宝具『プレアデイズ・スベルブック螺湮城教本』を喰い千切った。

『これが、アマチュア素人と我々（プロ）の違いだ。続きはヴァルハラで教授しよう』

全てが終わり、星の見える夜空の中、聞き忘れていた事があると、少佐はセイバーに問うた。

『君は何を望む？ この掛け値なしに狂った世。何千年であろうと闘争を繰り返す世界に、小さな王は何を望むのかな？』

それは自らが答える事の無かった事。目の前の相手を赦せぬ気持はあったものの、自分だけが答えないのは無礼だと感じたのだろう。セイバーは内心複雑な気持ちで答える。

——やり直したい、と。滅びゆく故国を救いたいと、そう彼女は語る。

だが、その言葉に少佐は笑みを零す。賛辞でも肯定でもなく、嘲りと否定に満ちた笑みを。

『判っていない。敗北もまた結末であり歴史。人が生きると言う闘争に賭ける輝きを、君は棄てようとしている』

無論、セイバーからすれば納得は行かない。罪なき民を見捨てるのかという言葉を投げ掛けるも、少佐はコートを翻して去る。これ以上は何を言っても無駄だと言う様に。



そして、少佐と別れた後、セイバーはライダーであるイスカンダルやアーチャーと酒席にて語らい、そこで自身の目的を二人に否定され、剣を抜きかけるも、アサシンが乱入。

結果としてイスカンダルがアサシンを撃退するも、結局セイバーの迷いは深くなり、アーチャーはその迷いを持ったセイバーに、そ

の苦悩を見る事が堪らないと関心を抱く。

そうした思いが交錯する中、少佐はセイバーと別れた後、アインツベルンの森へとシュレディンガーと部隊の一部を調査に出す。

この時、既にランサー陣営はアインツベルンに討たれ、戦いは中間戦になっていた。

そして、少佐の部隊がアインツベルンへと進軍した時、それは起きた。

天を裂く号砲。アーサー王を召喚する機会を奪われたアインツベルンは、新たなサーヴァントを喚び出していた。

狂戦士のサーヴァント。ギリシャ最大の英雄、ヘラクレスを。だが、ここに来て事態は急変した。

ミレニアムがアインツベルンの敷地内に入る直前、けたたましい轟音が中から響く。

黄金のサーヴァント、アーチャー。

十二の命を持ち、一度でも殺した宝具はキャンセルすると言う能力と、セイバー以上の俊敏性を併せ持つサーヴァントはしかし、この英霊の前には、手も足も出なかった。

夥しい宝具に貫かれ、崩れ落ちるバーサーカーを前に、アインツベルンから来たアイリス・スフィールは死ぬ事も赦されぬまま、アーチャーに拉致される。

目的は一つ。聖杯の器の確保。

しかし、この命令はアーチャーのマスターである遠坂の物ではない。

他の者達の預かり知らぬ所ではあるが、既にアーチャーは遠坂に見切りを付けており、どちらかと言えば遠坂の弟子である言峰に関

心があった。

そして、ミレニアムの隊員は一部始終を少佐に通達。

少佐は事態を聞きながらも静観し、一先ずは間桐の当主殺害の指示を出した。

御三家の人間でありながら令呪が与えられていない事は確かだが、間桐の当主は別だ。

あれがミレニアムに関心を置いている事を、少佐はこの地に来てから使い魔に見張られていた事から推察し、ドクを手配して当主である臓見を抹殺。

彼の残した蟲もサンプルだけを残して焼却した後、後継者である少女の身体からも虫を摘出し、家を爆破処理した。

ドク曰く、間桐の最大の目的は恐らく不老不死であり、サンプルとして確保した蟲や少女の身体から摘出した間桐臓見本体の尋問からもその答えが概ね正しいと判断すると共に、イレギュラーを完全に排除する為、少女の記憶を一から削除した。



残る陣営は三騎。この時点で聖杯の根を下ろす場所は未定であったが、無人である冬木市において、場所はもはや関係無い。

そして、誰と誰が戦うかも、また瑣末事であった。

イスカandalとセイバーの衝突は、当人達が予想しての事ではない。

彼らはたまたま出会い、そして戦う事になった。

迎え撃つ騎士王一人に対し、イスカandalは固有結界を用いる。

王としての絆。かつて戦った同胞たちとの在り方を見せつけ、間違いを正し、そして一騎打ちにて決着を付けようとしていた。

折れそうになる心。自分の王としての在り方に疑問を持ち、心が砕けそうになる中で、セイバーは背後をみた。

戦闘に狂い、戦場を闊歩する集団。ミレニアムの総軍を。

『実に素晴らしい。実に壮観だ。正に君達は戦場の華だな、征服王。だが、彼女を王と認めぬと言うのは早計だ。

どちらが真に王足り得るのかは、総力戦を以て決着を付けようじゃないか』

そして、セイバーは疑問に思う。どうして此処に来たのかと、彼と私は完全に決別したのではないかと。

『戦場があるのであれば兵士がいるのも当然だろう。

そして、兵士には指揮官が必要だ。さあ、君の手腕を見せてくれ。かつてブリテンを多くの外敵から死守し、自らが先陣に立って戦って見せた、雄々しい姿を私達に見せつけてくれ。

我らは僅かに一個大隊。千人に満たぬ敗残兵にすぎない。だが彼らを一騎当千の古強者だと私は信仰している。

ならばこそ、彼らと私で総兵力百万と一人の軍集団となる。

アーサー・ペンドラゴンよ。現段階を以てミレニアムは一時的に貴女の指揮下となった。

さあ、命令を！ 我々は点呼の声と共に、ただ前へと進軍する。軍歌の音を響かせ、軍靴の音を土へと刻み、高らかに歌いながら突き進もう！！』

それはただ、少佐と団員が戦争を味わいたただけなのかもしれない。彼らはただ、快楽を求めているだけなのかもしれない。

だが、それでもこの少佐はセイバーを試そうとしているのだ。

真に王足り得るのかと、セイバー自身が、王であるのか、それとも矮小な子娘であるのかを、この戦いで見極めようとしているのだ。故に、王足る者の矜持が、引く事を赦さない。ミレニウムによって渡されたZ？ndapp KS750に乗り込むと、持ち前の騎乗スキルで運転を敢行。

先頭に立ち、高らかと命令を下す。

唯一つ。前へ、ただ前へ、と。

元より出逢って間もない者たちに複雑な命令は出来ぬし、何より自分とは戦い方の基礎が違う。

故にこんな野獣を引き連れぬ様な指揮しか出来ぬ自分に内心憤慨しかけるも、団員達は笑って応えた。

彼らに不服は無い。涙一つ、舌打ち一つ零さずに、王たるセイバーに付いて行く。

ああ、これこそが戦場。敗残兵であった自分たちが、終ぞ得る事の出来なかった栄光の戦い。

地と泥にまみれ、誇りとは無縁の時代にあって、彼らは卑しい吸血鬼としてでなく、確かな英傑となって戦場を駆けた。

振り向くな、決して止まるな。

与えられた命令はただ前へ。あの美しい王と共に、我らはただ進軍する。

かつて自分達が背を向けた光。あの威光に追いつく為に。あの威光と共にある為に。

そこに在るのは確かな王道。兵と王は一つとなり、黒衣の集団は突き進む。

無論、彼らの相手は兵の一人一人が掛け値の無い英霊。

傷つき、斃れるカンツグルッペンを目に焼きつけながら、セイバーは遂にイスカンドルと対峙する。

此処に来て、宝具は必要ない。ただ互いが剣を振り上げ、どちら

が速く首を取れるかという原初の闘争。

だが、お互いの顔は、あまりにも清々しく、殺し合うには眩しかった。

闘争は決着を迎える。征服王の剣は騎士王の髪を数本奪うに留まり、騎士王の剣は征服王を袈裟に斬り裂く。

灰となって消える中、征服王は最後に笑って、

『これこそが王道……良き闘争であった。巻き戻すような真似は無粋よな』

そんな、どちらが勝ったのか判らない様な台詞を口にした。



そして二人の戦いが決着すると共に、残された者たちは舞台に集う。

聖杯の顕現。残りのサーヴァントが二騎になったことにより、不完全ながらも聖杯はあらわれた。

そして、魔術の師である遠坂を殺し、英雄王と契約を結んだ言峰は、妻を取り戻すべく戦場に立つ切嗣と対峙する。

新都のビル。最上階に待つ聖杯、アイリスフィールを、サーヴァントを失った敗者の身でありながら、夫として切嗣は言峰と死闘を繰り広げた。

そして、その階下では騎士王と英雄王が対峙する。

英雄王も今回の決着は予想外のモノだったのだろう。あの征服王

を倒すのは己だと考えていたが故に不快そうな顔つきではあったものの、セイバーが存在していた為に良しとした。

英雄王は、騎士王を見て傲岸に言い渡す。我の物となれ、さすれば聖杯を貴様にくれてやる、と。

無論、彼女は断った。己は国に身をささげた。故に、その提案は呑めぬと。

瞬間、空を切り裂きながら殺到する宝具の群。

人類最古の英霊は、ここに来てその全てをセイバーに放つ。

元よりパスが完全に繋がっていない彼女の魔力は尽きかけている。たとえ英雄王が殺す気でなくとも、その宝具を前にしては、セイバーの消滅も免れまい。

——だが、ここに奇跡は起きた。

『やれやれ、手弱女を摘み取るのであれば、もう少し紳士となりたまえよ、御老体』

『セイバーの魔力の供給の為に生かしておく筈だったが、賊はやはり捨てねばならんな』

その言葉と共に、英雄王の宝具はミレニウムに殺到する。

だが、彼らに恐れなどはない。

胸にあるのはただ歓喜。あと一歩、あと一歩でこの負け続けの戦いを勝利で彩れるのだと言う確信と、至高の王との戦いが、今の彼らの全てだったのだから。

『黄金のサーヴァント、何の事はあらん！』

その言葉の瞬間、英雄王によって放たれた無数の宝具は、伊達男、トバルカインのトランプによってほんの僅かに軌道を逸らされ、あらぬ方に飛んで行く。

そして、その宝具とトランプを掻い潜る様に、鉛の弾丸は突貫する。

『有象無象の区別なく、私の弾頭は赦しはしない』

魔の獵師、ウィップバーン。

指揮官でありマスターでもある少佐の命令の下、弾丸は黄金の王の眉間に迫り、確かな手ごたえを感じさせるはずだった。

そう、筈だったのだ。

『な……』

命中した筈の弾丸は初めからなかったかのように消え失せ、稲妻の如き閃光が彼女の胸を撃ち抜いた。

宝具の名はフラガ・ラック。敵が切り札を出した時、その宝具は後に出て尚先に命中し、敵の切り札をキャンセルする。

魔の獵師の弾丸は、ここに來て最悪のカードに当たったのだ。

『この程度か。やはり雑種は雑種。王の威光には足元にも及ばんな』

トバルカインのトランプも、軌道を微かにそらせば後は碎けるのみ。圧倒的な物量差に押され、その身を欠片も残す事無く吹き飛ばされると、残された団員達も一瞬で破れる。

もはや勝負はあったかと、そう思えた瞬間に夜闇の影から一匹の魔狼が躍り出る。

ヴェアヴォルフ。ミレニウム最高戦力、大尉。

夥しい宝具の群を霧となる事で回避し、持ち前の速度で黄金の王の喉笛を噛み千切らんと疾駆する。

だが、

『誰が拝謁を許した？ 雑種』

言葉と共に、魔剣の群が大尉を貫く。如何に身体を霧に変えようと、攻撃の瞬間は生身となる。

この英雄王に、慢心はあれど油断はあらず。残る一人となった少佐に、確実に心臓を貫く呪いの槍を叩き込み、勝敗はここに決した。そう。英雄王は指揮官に勝ち、騎士王は英雄王に勝つ。

『第四次聖杯戦争が参加者にしてマスター。ミレニウム指揮官、少佐が命ずる。』

セイバーよ、英雄王を倒せ』

未だ一度として使われる事の無かった令呪。

その言葉は制約としてでなく、英雄王を倒す為だけの純粹な魔力をセイバーに送り、一時的とはいえかの伝説の騎士王を再現する。

『貴様！ 何故、』

疑問を口にするも、既に時遅し、未だ完全に消滅していない大尉の身体から出た末期の霧はセイバーの姿を眩ませ、閃光の如く駆けた彼女は、人類最古の王を切り裂いた。



『少佐……貴方は』

『はは……心臓の無い者の心臓を狙った所で、私は殺せんよ』

もはや彼の身体は半身が無い。剥き出しとなった体から見えるのは、人体には有り得ない、鉄の寄せ集めだった。

『なあ、騎士王。君はまだ……やり直しを望むのか？』

掠れる声。最早立ち上がる事さえ不可能な少佐は、最後に問う。本当にそれでいいのか？ と。

『私は、』

その言葉を返す間もなく、二人は暗黒に包まれた。目の前にあるのは、何も無い空間。聖杯戦争の勝者たる二人に、聖杯の担い手。

アイリスフィールの姿をした何かは、静かに語る。

『貴方達の願いは成就される。さあ告げて、セイバー。今は無き王国を救いましょう』

『ま、待って下さい！ まだ準備が、』

『その前に、君はどうやって王国の興廃の一助をになうのかね？』

突然多事態に慌てるセイバーを余所に、少佐は問う。まるで下らない物を見せつけられていると、そう唾棄するかのように。

『貴方なら判るでしょう？ 少佐。かつて吸血鬼の真祖となる資格を持った貴方なら』

そうして、見た目麗しい女性の姿をした悪魔は語る。

『呑みこんでしまえば良い。あらゆる敵も、領民も、反旗を翻す可

能性のある臣下達も。

その全てを呑み込んでしまえば良い。そう、己の魂も呑みこんで、暗い一つの塊となりましょう。

永遠に王国は残る。誰も傷つかず、未来永劫に残り続ける理想郷。セイバー。貴女の夢見たアヴァロンは、今日の前にあるのよ？』

その言葉に、セイバーは絶望する。

『なんだ、それは？ そんなモノが、願望器の真実だと言うのか！？ お前は奇跡を叶えるのではないのか！？』

『万人に成し得ない事を行う以上、それは奇跡と呼べるでしょう？ 少佐、貴方はどうです？ 思うがままに、望む事が出来ますよ？』

ソレは正に悪魔の囁き。今この場に於いて、目の前のモノは居てはならない存在だと言う事をセイバーは理解し、戦争狂であるマスターがどう応えるのかを、固唾をのんで見守る。

答えは、

『ああ、素晴らしいな。だが——ごめんだね』

答えは、否定だった。セイバーにしても、その答えは意外だったのだろう。

戦争に生きる事のみを生きる手段とし、民草の犠牲や目的さえ棒に振る男が、絶望に染まるとはいえ叶うべき願いを否定するなど、誰が予想しえようか。

『何故だ！？ 世界中がお前達を忘れ、世界中がお前達を無用と蔑んだ！！』

だから戦いたかったのだろう！？ 唯死ぬことに耐えられないから動き、ここまで来たのではないのか！？』

自らが死ぬために……！！　と聖杯は叫ぶ。

『——その通りだ。我々は狂気と戦場の只中を歩き、死ぬ為だけに闊歩する灰色の亡霊だ。』

お前の言う事は確かに素晴らしい。きっとそれは歓喜であり甘美なのだろう。

何物にも代え難く、この世の如何なるモノよりも溺れてしまいたい快楽なのだろう。

……真っ平御免だね。私は私だ。俺は俺だ。

何十とある命に混ざる？　永劫に繰り返す戦い？　実に素晴らしい。

己を忘れ去られる事も無く、多くの命と共にあり、彼らと共に、時には敵対し、ヴァルハラの子供として戦い続ける。正にエインフエリアそのものだ。

だが駄目だ。そんなモノは認めない。

俺は人間だ。この魂も髪の毛一本も俺のモノだ。そしてお前が巻き添えにしようとしている者たちの命もそいつらのモノだ。

俺は赦さない。俺は認めない。闘争とは己と他者との相違から生まれる。

私は貴方とは違う。あちらはこちらとは違う。それこそが戦いだ。人が持つ宿業だ。

確かに俺は戦場を闊歩する。死にたがりの連中を引き連れて。

次の闘争も、その次の闘争も、無限に歩き戦い続ける。無限に運命に抗い続ける。

お前は言ったな。俺は死ぬ為に来たのだと。その通りだ。

この世界は広く、俺達を殺し、俺達が殺す怨敵が必ずいる。故に俺は足を運んだのだ。

ここは俺達が死ぬべき場所であり、俺達が殺すべき場所である。人が負けるのも戦いならば、勝つのも戦いだ。

国が富む事も戦いならば、滅ぶ事も戦いだ。

我々が戦うのであれば、我々を滅ぼす者が居なくてはならない！
』

そうして、永い発言と共に言葉を区切り、しっかりと聖杯の担い手をにらみつける。

『全ての選択は、運命は人間のモノだ！ 結末も幕引きも、勝利も敗北も！

全ては当事者のモノだ！ 失せろ、杯……！』

お前だけは認めないと言う様に、少佐は相貌を怒りに滲ませて絶叫した。



世界は晴れる。熱風と禍々しい夜空の中、既に瓦礫と化した新都の中で、黒い太陽が輝いている。

『あれを、壊して貰っても構わないかね？』

それが、彼女の望みを打ち砕く結末だという事を知っていながら、少佐はそう口にする。

だが、セイバーは迷わない。あれがどういうものなのかを、彼女は既に知っているから。

『はい。令呪の使用を』

サーヴァントである者が、聖杯を壊す事は叶わない。故に令呪に

よる命令を下す。

二画を完全に使い切り、聖剣を開放するだけの魔力を彼女に与える。

『約束された――』

思えばそう……少佐自身、彼女の剣を見た事は無かった。

かの騎士王の伝説。あらゆる栄光の先駆けであり、人類すべてが知るであろう輝ける幻想。星の手によって作られた最後の幻想。

『――勝利の剣!!』

その輝きを、己に使われなかった事への不満と哀愁を滲ませて、少佐は聖杯の最後を見届けた。

そして、夜が明ける。眩い星々は既に無く、暁が世界を照らそうとしていた。

もう夢の時間は終わる。ミレニアムはドクやシュレディンガーこそ残っているものの、兵力のほぼ全てを失った。

だが、それでも満足だった。完全に碎かれ、崩壊した聖杯。得た物などは何もないが、この胸には勝利の余韻がある。

『もう……行かなければなりません』

ぼつりと、彼女はそんな事を呟く。思えば、このサーヴァントとマスターは、ろくな会話をしていない。

互いに衝突し、出逢うとなれば常に戦争と闘争。

一体自分達がどうして主従関係となったのか、ほとんど疑問だった。

けれど……。

『私は……間違っていると思いますか？』

『忘れたとは言わないでくれたまえ。君は私と私の部隊を率い、征服王を打倒し、黄金のサーヴァントさえ討ちとった。』

君こそが真の勝者。英雄の中にあつて最高の王たり得る事を証明した。

君は王としては間違つてはいない。滅びゆく国は王の間違いだけでは起こらない。滅びと再生は歴史の証明だ。

誇りたまえ——君は素晴らしい王であり、誰よりも誇り高い騎士だった』

いつものにやついた薄気味悪い笑みで無く、真の賛辞を持った笑みで、少佐は語る。

そして、彼女もまた、笑顔で答えた。

『感謝します。最後に——ひとつだけ教えて欲しい。』

貴方の本当の名を』

ソレは既に失われたモノ。あの大戦の中、自分がミレニアムの指揮官となった時から置いて来たモノ。

『……モンティナ・マティックス』

もう語る事は無い、失われた名を少佐自身、思い出すように言葉にし、

『——モンティナ・マティックス』

彼女は瞳を閉じて、静かに呟く。

決して忘れない様に、王としての自分が間違っていないかったと、そう認めてくれたこの男を、胸に残しておきたかったから。

『私は、アルトリア。マティックス……貴方を、忘れない』

そうして、本来であれば出逢った時に済ませるであろう信頼の証を、彼らは別れ際に行った。

目に映るのは、暁の輝き。かつて己が背を向けた光に、微かに目を背けるとそこに彼女の姿はもう無かった。

『Auf Wiederseh'n Kamerad（さようなら、戦友）』

その言葉と共に、少佐は片足で立ち上がり、後ろを向く。

この戦いで、何もかもを失った男。そして、自らに敗北を与える男。

衛宮切嗣の姿を、少佐は眺めた。

『ああ……やはり、君が残ったか』

この戦いに、彼が何を望むのか。それは既に、偵察に出ていた部隊の者から聞いていた。

彼は紛れもなく平和を尊ぶ人間であり、正義の味方を目指すモノ。すなわち、戦場に立つ己とは真逆の存在だと言う事を。

かちやりと、握りしめた銃把と、起こされる撃鉄の音が聞こえる。

響く銃声。転がる葉莢。

乾いた音はあまりにも呆気なく、少佐は静かに地に崩れる。これが幕引き。この結末は、彼自身が望んだモノだ。

そして。この正義の味方に、一つの希望を残してやる事も。



ありふれた病院の一室で、間桐桜は目を覚ます。

思いだせるのは、全てが終わった新都の中で、男に抱えられていた事だけ。

彼女は何も思い出せない。自分が受けた虐待も、自分が何者かという事も。

桜という名前と先の出来事以外を、彼女は覚えていなかった。

そして、病室にある男が現れた。くたびれたコートと、ぼさぼさな髪の壮年の男性は、彼女に問う。

自分と共に暮らすか、施設に行くかを。

桜は問う。貴方は誰ですか？ と。

男は恥ずかしそうに、そして、何処か悔しそうな顔で答えた。

『僕は――魔法使いなんだ』



どうして少佐は、こんな偽善者の様な事をしたのだろうか？

イレギュラーであり敵になるかもしれない少女を、敢えて衛宮切嗣と言う人物を調べさせ、彼の前に間桐桜を置いたのか？

きつと、そう言った事をしなければ、あの騎士の少女に面と向か

って語る事が出来なかったからだ。

暗くて冷たい影では、光と共に消えてしまう。彼女と共に行動するのであれば、それ位はしなくてはいけないと思ったから。



思わず全部読んでしまった……て言うか何、少佐がカッコよすぎんですけど!?

つか、モンティナ・マティックスってコヨーテのあれよね!?
ガチで同一人物なの!?

色々ツツコミどころは満載だが、意外と面白かったので、取っ組み合いをしている馬鹿二人に声をかける。

「すみませーん! 全巻下さい!」

「「ありがとうございますーす」」

律義に着席して五千円札を受け取る二人。何だかんだで良いコンビであった。

ていうか、私はここで何をすればいいの……?」

えー皆様お久しぶりです。と言っても、ゼロ魔とかも投稿したりするので、そちらをご覧になって頂いている方はそこまで久しぶりではないかもしれません。

ちなみに例によってこちらが更新されるのは、ゼロ魔の方がスランプ状態だったからです。

まあ、ギャグを永い間書いて居なかった事も相まって、かなりパUNCHの効いてないギャグになってしまいました……。

ちなみに今回の少佐の同人誌『第四次聖杯戦争〓鉤十字の指揮官〓』はヘルシングの連載が終了してから作者が書きたかったクロス作品の草案だったりします。

ホントはこいつを『なろう』に持ってきたんですが、スケジュールの都合と現在の作品の重複具合から見ても絶対に書けないと判ったので、今回少佐の同人誌扱いで出させて頂きました。

少佐が妙に綺麗過ぎるのもそのためです。

ああ……時間があれば書きたい。

と、そんなSS書きとして駄目すぎる発言をしてしまうぐらい、この作品は個人的に思い入れがあります。

まあそれはさておき、ここからはちよつとした報告を。

私は毎年国外に出張に行くのですが、今年もその例にもれず、8月の下旬から10月まで出張に行ってくるので、その間の更新は出来ません。

待って下さる方には大変申し訳ないと感じていますが、何卒、ご理解の程を宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1535/>

撲殺乙女☆修羅街道！！

2010年10月11日03時27分発行